



当面する課題について

教育学部長 片岡 徳雄

今年、平成元年度は、教育学部の西条キャンパス移転の年であります。

ただ今は「秒読み」段階に入っていますが、ここに至るまで、学内外から多大のご配慮とご尽力をいただきました。お礼を申し上げますとともに、移転につきまして、今後いっそうのご支援をお願い申し上げます。

移転学部としては、工学部、生物生産学部が続く第三番手ということになります。しかし、教育学部の場合は、分校統合という問題が、付随というよりは、実質的な大命題としてあります。課題の多い、ここ数年の明け暮れになろうかと存じます。

さて、当面するその二、三を述べさせていただきます。

まず第一は、組織運営の問題。

考えますと、移転によって一番得をするのは、教育学部ではないでしょうか。広島大学発足以来、東千田と福山の両局部に分かれて運営されてきた学部が、これでスッキリ一つになる。日本の国立大学で今、分校のあるのは、一橋大、大阪教育大、それに広島大。全国でも珍しい組織上の変則と不便さが、今回で解消される。なんとしても、これは前進・飛躍であります。

しかし、問題も多く生まれるのではないかな。なるほど、統合にからむ管理運営の原則については、二年前から成案を考えて参りました。しかし「家憲」は法規の手直して済まして、運営にからむ新しい「家風」は一朝一夕にはできない。「本家」「分家」意識を越えた、精神的・風土的な真の統合・融合はまさにこれから。学部構成員お一人おひとりの「内なる」課題と考えています。

第二は、教育指導上の問題。

言うまでもありませんが、教育学部は旧制の文理大、高師、女高師などをそれぞれ基礎にして発足しましたが、その後、いわばパラレルに研究・教育がなされてきた嫌いがあります。もっとも最近では、大学院研究科の充実整備により、研究の上では、組織的・学際的な多方面での研究の気運が出て参りました。しかし、学生指導の上では、まだまだと言わざるをえません。

今回の両部局の統合は、この点、院生や学部生の指導の上で、とりわけ改訂期にある教員養成カリキュラムの上で、弾力的・統合的な刷新を試み、新しい時代の要請に即した人材育成の試みができるのではないかな。夢を描きたくなるものの一つであります。

第三は、研究・教育の国際化問題。

今年三月、ミネソタ大学教育学部と学部間交流協定が結ばれました。国際化の面での大きな前進でもありますが、これに限らず、研究と教育に関する国際化は、既に多くのプロジェクトをもって進展して参りました。学部内の国際交流委員会などを中心に、この面でのいっそうの深化・拡充が期待される所であります。

幸い、十数年前からは、全学留学生の日本語研修にも学部として力を尽くしてき、三年前には、日本語教育学科の新設をみました。これらの制度的な発展・整備も、大いに急を要する所でありましょう。

西条キャンパスに移転した後――。

「新教育学部のイメージ」はどのようなものか。それをどのように現実化してゆくか。

当面の責任者の一人として、思いを述べたにすぎません。これらに限らず、またこれらにこだわることなく、多くの構成員の方々から、ビジョンあふれるご提案を期待する次第であります。